

平成21年6月10日現在

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2006～2008

課題番号：18401035

研究課題名（和文） 増加する華人ニューカマーズの中国における送出プロセスの解明

研究課題名（英文） Emigration process of increasing Chinese newcomers in Japan

研究代表者

山下 清海（YAMASHITA KIYOMI）

筑波大学・大学院生命環境科学研究科・教授

研究者番号：00166662

研究成果の概要：本研究では、中国の改革開放以後、増加している在日華人ニューカマーズの中国における送出プロセスを明らかにすることを目的とした。現地調査は、華人ニューカマーズの主要な出身地である東北3省（遼寧省・吉林省・黒龍江省）および福建省において実施した。なかでも、吉林省延辺朝鮮族自治州および福建省福清市において、日本語学校、日本渡航経験者、日本在留者の留守家族などを対象に聞き取り調査、資料収集を行い、華人ニューカマーズの中国における送出プロセスに関して、具体的事例に基づいて分析した。

交付額

（金額単位：円）

年度	直接経費	間接経費	合計
2006年度	3,600,000	0	3,600,000
2007年度	2,800,000	840,000	3,640,000
2008年度	2,900,000	870,000	3,770,000
総計	9,300,000	1,710,000	11,010,000

研究分野：人文地理学

科研費の分科・細目：人文地理学・人文地理学

キーワード：華僑 華人 中国新移民 在日中国人 ニューカマーズ 福建省福清市
吉林省延辺朝鮮族自治州 エスニック地理学

1. 研究開始当初の背景

本研究の研究代表者である山下清海は、大学院生以来、一貫して華人社会・チャイナタウン研究に従事してきた。これまで日本・東南アジア・北アメリカ・南アメリカ・オセアニア・ヨーロッパにおける華人社会・チャイナタウンの実態調査を実施するとともに、中国国内においても、海外移民の主要な送地域においてフィールドワークを行ってきた。

これらの主要な成果をもとに、すでに『東南アジアのチャイナタウン』（古今書院、1987年）、『シンガポールの華人社会』（大明堂、1988年）、『チャイナタウン—世界に広がる華

人ネットワーク—』（丸善、2000年）、および『東南アジア華人社会と中国僑郷—華人・チャイナタウンの人文地理学的考察—』（古今書院、2002年）の4冊（いずれも単著）を公刊した。さらに、山下清海編『華人社会がわかる本—中国から世界へ広がるネットワークの歴史、社会、文化—』（明石書店、2005年）では、改革開放以後の中国からの華人ニューカマーズの動向について、グローバルスケールから論じ、日本国内においても、華人ニューカマーズによる池袋チャイナタウンの形成について論じた。

これまでの山下清海の一連の研究において、伝統的な華人社会の形成、および世界各

地のチャイナタウンの地域的特色については、かなりの程度明らかにすることができた。しかし、世界各地において近年共通してみられる注目すべき現象は、華人ニューカマーズ（中国では「新移民」と呼んでいる）の急増である。これら華人ニューカマーズの増加は、現代および今後の華人社会を考察していく上で、きわめて重要な視点であるが、研究例はきわめて乏しい状況にある。

そこで、山下清海が研究代表者になり、日本における華人社会研究の第一人者である小木裕文（立命館大学）と今回の共同研究を企画した。中国でフィールドワークを実施する場合には、人的ネットワークがきわめて重要であり、また、中国人社会の内部事情についても十分な理解が必要である。また、現地調査をスムーズに進めるためには、通訳は使わずに実施する方がよいのは言うまでもない。このため、中国出身の人文地理学研究者である張長平（東洋大学）・張貴民（愛媛大学）・杜国慶（立教大学）にも、共同研究者として参加を要請した。

また、後述するように、最近、日本において増加している華人ニューカマーズの中には、中国朝鮮族が非常に多く含まれているのが大きな特色である。朝鮮族社会でのフィールドワークを実施する際には、中国語だけでなく朝鮮語の能力を有する研究者が必要であり、シンガポール留学の経験を有し、異文化教育の専門家でもある尹秀一（創価大学）にも本研究プロジェクトの一員に加わってもらった。さらに、朝鮮半島の歴史にも詳しく、国内外において、観光地理学・交通地理学・都市地理学分野の豊富なフィールドワーク経験を有する松村公明（立教大学）の参加を求めた。

2. 研究の目的

中国においては、1970年代末以降の改革開放政策の進展に伴い、新たに大量の移民が、華人ニューカマーズとして世界各地へ渡るようになった。今日、世界の華人社会は、ダイナミックに膨張と拡散を続けており、従来の伝統的な「華僑像」ではとらえきれない新しい局面を迎えている。日本においても、在留外国人統計によれば、1982年末に6万人足らずであった中国籍保有者は、華人ニューカマーズの増加により、2007年末には600,889人となり、初めて韓国・朝鮮籍を超えて、日本最大の外国人集団となった。

このような状況を踏まえ、本研究では、中国の改革開放以後、増加している在日華人ニューカマーズの中国における送付プロセスを、中国における現地調査に基づいて明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

近年における華人ニューカマーズの主要な出身地である東北3省（遼寧省・吉林省・黒龍江省）および福建省、なかでも、吉林省と福建省福清市においてインテンシブな調査をおこなった。延辺朝鮮族自治州は、1990年代以降、日本へ華人ニューカマーズを多く送出した地域であり、福建省福清市は、明治時代以降、日本へ渡る華人が多く、伝統的な移民母村であった。両地域において、日本語学校、日本語教育機関、海外留学・労務斡旋会社、日本渡航経験者、日本在留者の留守家族、日系企業などを対象に聞き取り調査、資料収集を行った。

4. 研究成果

本研究では、中国における調査のなかでも、特に以下の2か所の研究対象地域において、インテンシブな調査を実施した。

前述したように吉林省延辺朝鮮族自治州は、1990年代以降、渡日者が急増した新しい「僑郷」（「華僑の故郷」という意味）と位置付けることができる。延辺朝鮮族自治州の州都延吉とその近郊で、日本からの帰国者、日本留学斡旋業者、日本語教育機関などから聞き取り調査を実施した。

一方、福建省福清市は明治期より日本への出稼ぎ者が多い地区で、伝統的な「僑郷」である。1980年代半ば以降、多数の福清出身者が日本へ渡った。調査では、多くの日本からの帰国者から渡日の動機・プロセス、滞日時の動向、帰国後の状況などについて詳細な聞き取り調査を実施した。

（1）中国東北地方の場合

①日本における東北出身者の増加

在留外国人統計に基づいて、日本在留中国人人口の推移をみると、華人ニューカマーズが増加したのは、1978年末の中国の改革開放政策実施後、とりわけ1980年代後半以降である。在日中国人人口が増加する過程で、非常に興味深い特色は、出身地（本籍地）の変化である。

日本政府は1983年に「留学生10万人計画」を打ち出し、就学生の入国手続きを簡素化した。一方、中国政府は1986年、公民出境管理法を施行し、私的理由による出国も認めるようになった。このような日中両国の規制緩和により、中国から就学ビザや留学ビザで来日する者が急増した。

当時の中国人就学・留学生の多くは、上海市と福建省の出身であった。日本の華人社会の特徴は、台湾出身者が多数を占めて来たこ

とであったが、1990年の在日中国人(150,339人)の出身地をみると、台湾省出身者が占める割合が低下し、①台湾省28.3%、②上海市16.9%、③福建省11.6%の順であった。2000年には、在日中国人(335,575人)のうち、①上海市13.5%、②黒龍江省11.8%、③遼寧省11.8%の順となり、東北地方の出身者が増加した。2007年には在日中国人(606,889人)のうち、①遼寧省16.1%、②黒龍江省10.3%、③上海市9.5%、④吉林省8.5%の順となり、遼寧・黒龍江・吉林の東北3省を合計すると全体の34.9%(211,951人)を占めるまでになった。

②東北地方出身ニューカマーズの中国における送出国プロセス

中国における現地調査、日本国内の華人ニューカマーに対する調査などから、東北地方出身のニューカマーズが増加した背景・要因などについて検討し、東北地方から日本への送出国プロセスについて考察した。

東北地方は、1932年から1945年の終戦まで、「満州国」として日本によって占領され、日本語教育が実施された。中華人民共和国成立後も、東北地方は中国における日本語教育の中心地域であった。経済発展が著しい中国の沿海地域では、欧米への関心が高いのに比べると、東北地方は日本への関心も高い地域であるといえる。

2000年の中国の人口センサスによれば、中国の55の少数民族のうち、朝鮮族は人口順で13位(1,923,842人)であり、その大多数は東北地方に居住している。朝鮮語は文法や発音などで日本語と類似しており、朝鮮族にとって日本語は、外国語の中で最も学び易く、大学入学の外国語科目の試験では得点を取り易い外国語であった。1980年代後半から、就学ビザを取得して日本へ渡航できるようになると、東北地方では、特に日本語能力の高い朝鮮族の間で、日本への留学ブームが起こった。朝鮮族にとっては、最も身近な外国は韓国であるが、韓国より多くの収入が得られ、子どもの時から学校では、英語でなく日本語を外国語として学んできた朝鮮族にとって、日本は渡航希望先として第1の国であった。先に日本へ行った親類や友人を頼り、チェーン・マイグレーションにより日本へ渡航する朝鮮族が増加していった。東京の池袋駅や新大久保駅周辺には、朝鮮族が開業した中国東北料理店や中国朝鮮料理店などが集中している。延辺朝鮮族自治州の延吉郊外の朝鮮族の村では、若者の多く(男女とも)が、日本や韓国に渡航したまま帰国せず、海外からの送金によって高齢者ばかりが生活している村がみられる。

東北地方における外国企業では、韓国企業

の進出が最も目覚ましいが、日本企業も韓国に次いで重要な地位を占めている。特に大連には日本企業のコールセンターやソフト関連施設が多数設けられ、日本語能力が高い人材が求められている。東北地方は、中国国内でも日本語学習者や日本留学希望者が多い地域である。日本語を習得して大連、さらには上海、深圳などの沿海地域の日系企業への就職を志望する者が多い。

近年の中国国内の留学ブームを反映して、大連、瀋陽、ハルビン、長春、延吉など東北地方の主要な都市には多数の外国語学校・留学斡旋会社がある。2003年に発生した福岡一家4人殺害事件(犯人の3人の中国人留学生のうち2名は吉林省出身)以後、日本留学のビザ申請に対する日本側の審査が厳格化したため、外国語学校や留学斡旋会社では、主要な渡航先であった日本から、重点を韓国への留学や出稼ぎに切り替えている。また、オーストラリア・ニュージーランド・シンガポール・カナダなど英語圏への留学者も増加している。

(2) 福建省福清市の場合

①伝統的僑郷としての福清と在日福清人

1990年に県から市に昇格した福清市は、行政的には福州市に属している。貧困地域であった福清からは東南アジアや日本への出稼ぎ者が多い典型的な僑郷であった。福清の海岸部からは明治期から日本への出稼ぎ者が多く、長崎ちゃんぽんの考案者として知られる陳平順も、1892(明治25)年に長崎へ渡った。日本における福清人の多くは長崎に上陸後、主として反物行商に従事しながら、九州各地、さらには北海道、樺太まで全国各地に拡散して行った。

第二次世界大戦後、これら福清人は反物行商から全国各地に定着して、衣料品店や中国料理店の経営を行うものが多くなった。

日本における新華僑の急増は、1980年代後半である。1988年には、日本入国ビザの早期発給を求めた中国人青年が、上海日本領事館前に連日座り込む事件が起こった。この時の中国人の中には、上海人とともに福清人が多く含まれていた。1980年代後半、来日した新華僑の出身地をみると、上海市と福建省(その大半は福清出身者)であった。日本において、福清出身の新華僑の増加の背景には、在日の老華僑が多い僑郷としての福清と日本との密接な関係があげられる。すなわち、福清出身老華僑の存在が、日本への渡航を促した。福清出身の老華僑の中には、祖父や父親の出身地の発展のために、学校を建設し、社会事業に寄付を行うなどの貢献を行ってきた。

②新華僑の僑郷としての福清

福清、特に中心部の三山鎮・高山鎮・東瀚鎮などの龍高半島南部では、家族や親類の中に、日本に居住している者、日本から帰国した者、日本渡航の準備をしている者などが多い。

新華僑の日本滞在経験者の帰国後の動向をみると、家屋の新改築、料理店、日本語学校などの経営、その他の新事業への投資などが多い。子弟によりよい教育を与えるため、生活の利便さを求めて、出身地を離れて、福清市の中心地である融城や福州市内にマンションや住宅を購入する者も少なくない。

日本から帰国した新華僑の生活水準の向上は、周囲の人々の日本渡航への希望を刺激した。しかし、福清出身者の日本における犯罪や不法滞在の増加により、福清出身者に対する日本の入国管理局の審査が厳格化するにつれ、1990年代当時と比べ、日本渡航が難しくなっている。その結果、東南アジア、北アメリカ、ヨーロッパ、南アメリカなど日本以外の外国への渡航者が増加している。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 15 件)

- ①張 長平：華人の世界分布と地域分析. 国際地域学研究 (東洋大学国際地域学部), 12, 83-98, 2009, 査読無
- ②松村公明：中国吉林省・延辺朝鮮族自治州における国境観光の地域的特色. 立教大学観光学部紀要, 11, 97-104, 2009, 査読無
- ③山下清海：景観からみる池袋チャイナタウン. 地理月報, 503, 6-7, 2008, 査読無
- ④杜 国慶：中国少数民族の分布に関する考察. 立教大学観光学部紀要, 11, 105-109, 2008, 査読無
- ⑤山下清海：第二次世界大戦後における東京在留中国人の人口変化. 人文地理学研究, 31, 97-113, 2007, 査読無
- ⑥小木裕文：東馬沙巴州的華人社会和華文教育. 新世紀学刊, 4 (2), 76-84, 2007, 査読有
- ⑦張 貴民：中国における地域格差の是正と調和社会の構築. 地域創生研究年報, 2 (2), 63-77, 2007, 査読無

[学会発表] (計 15 件)

- ①山下清海・張 長平・張 貴民・松村公明・小木裕文・杜 国慶：在日華人の僑郷としての福建省福清市の地域性—在日新華僑の送出地域に関する地理学的考察(1) —. 2009年度日本地理学会春季学術大会, 2009年3月29日, 帝京大学.
- ②張 貴民・山下清海・張 長平・松村公明・

小木裕文・杜 国慶：僑郷としての福建省福清市における農村地域の特徴—在日新華僑の送出地域に関する地理学的考察(2) —. 2009年度日本地理学会春季学術大会, 2009年3月29日, 帝京大学.

- ③松村公明・山下清海・張 長平・張 貴民・小木裕文・杜 国慶・吳 晨峰：新華僑の送出にともなう福建省福清市の地域変化—在日新華僑の送出地域に関する地理学的考察(3) —. 2009年度日本地理学会春季学術大会, 2009年3月29日, 帝京大学.
- ④張 長平・山下清海・張 貴民・松村公明・小木裕文・杜 国慶：在日中国人の移入移出地域分析—在日新華僑の送出地域に関する地理学的考察(4) —. 2009年度日本地理学会春季学術大会, 2009年3月29日, 帝京大学.
- ⑤尹 秀一：中国における海外出稼ぎにともなう教育の問題—延辺朝鮮族自治州を中心に—. 2008年度日本華僑華人学会, 2008年11月15日, 筑波大学.
- ⑥山下清海・尹 秀一・松村公明・杜 国慶：在日華人ニューカマーの中国における送出プロセス—中国東北地方の事例から—. 2008年度人文地理学会大会, 2008年11月9日, 筑波大学.

[図書] (計 9 件)

- ①篠田武司・西口清勝・松下 冽編：『グローバル化とリージョナリズム』御茶の水書房, 2009, 430p. (小木裕文：華人ネットワークの変容—福清僑郷と福清移民ネットワークを事例に—. pp. 357-382 所収)
- ②稲垣 勉・杜 国慶編：『暮らしと観光—地域からの視座—』立教大学観光研究所, 2009, 277p.
- ③山下清海編：『エスニック・ワールド—世界と日本のエスニック社会—』明石書店, 2008, 260p.
- ④石原 潤・金坂清則・南出眞助・武藤 直編：『アジアの歴史地理 1 領域と移動』朝倉書店, 2007, 341p. (山下清海：東南アジアへの華人の移住. pp. 242-251 所収)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山下 清海 (YAMASHITA KIYOMI)
筑波大学・大学院生命環境科学研究科・教授
研究者番号：00166662

(2) 研究分担者

小木 裕文 (OGI HIROFUMI)
立命館大学・国際関係学部・教授
研究者番号：70160786
張 長平 (ZHANG CHANGPING)
東洋大学・国際地域学部・教授

研究者番号：50351185
張 貴民 (ZHANG GUIMIN)
愛媛大学・教育学部・教授

研究者番号：50291620
杜 国慶 (DU GUOQING)
立教大学・観光学部・准教授

研究者番号：40350300
尹 秀一 (YOON SOOIL)
創価大学・別科日本語研修課程・教授

研究者番号：00240177
松村 公明 (MATSUMURA KOMEI)
立教大学・観光学部・教授

研究者番号：20261646

(3) 連携研究者

なし